

幼稚園教育要領等の 改訂に伴う保育実践のあり方に関する一考察

－絵本の読み聞かせに焦点をあてて－

井上 剛男

要旨

本稿の目的は、平成 29 年告示の『幼稚園教育要領』、『保育所保育指針』、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』に記載された保育内容（言葉）に関する力を育成する保育実践のあり方について、保育現場で日常的に行われている絵本の読み聞かせを例に吟味することである。

その結果、絵本の読後に余韻を味わうため、子どもに読後の感想を訊かないという保育現場で普及している絵本の読み聞かせのあり方が、現行の保育内容（言葉）に記された力を育てることを次の 2 つの点で阻害していることを明らかにした。1 つ目は、絵本の読み聞かせを通して経験したことや考えたことなどを自分の言葉で表現し、伝え合う機会を奪っている側面である。2 つ目は、他の子どもが感じたことや考えていたことを聞く機会を奪い、子どもが想像できることを独我的で広がりやに欠くものになっている蓋然性である。

最後に、読後の感想を求めず余韻を味わえるようにすべきというスタイルが普及した背景を分析し、絵本の読み聞かせの後に語彙力や文章理解力を試すような対話を行うことにつながった昭和期の『幼稚園教育要領』を批判し、絵本から想像する自由や楽しさに気づかせようとした平成元年の『幼稚園教育要領』の影響が見られることを示した。したがって、保育者による読後の言葉がけは、絵本の内容を理解できているか確認するものではなく、絵本を通して感じたことを自由に表出できるよう配慮すべきだと言える。

キーワード

絵本、読み聞かせ、保育内容（言葉）、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿、読後の感想

1. 問題意識

平成 29 年に『幼稚園教育要領』、『保育所保育指針』、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』が改訂され、平成 30 年に施行された⁽¹⁾（以下、平成 29 年告示の『幼稚園教育要領』、『保育所保育指針』、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』を「現行の要領・指針」と表記する）。今回の改訂では、幼稚園、保育所、幼保連携型認定こども園の 3 歳以上児の保育内容が共通化され、5 領域のねらい、内容、内容の取扱いがほぼ同一の記

述となった⁽²⁾。また、現行の要領・指針には、3つの「育みたい資質・能力」⁽³⁾と10の「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」⁽⁴⁾が新たに規定された。今回の改訂によって『幼稚園教育要領』、『保育所保育指針』、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』は、幼児期の教育の充実と小学校教育との接続を意識した内容に様変わりしたと言える。しかし一方で、「環境を通して行う教育」など従来の保育方法も踏襲され、保育実践には大きな変更を求めるものではないようにも映る。今回の改訂が、従来の保育実践にどのような変更を促すものなのか、絵本の読み聞かせという保育実践を例に検討していく。

絵本の読み聞かせは、保育現場で日常的に行われている保育実践である⁽⁵⁾。絵本の読み聞かせが幼児期の教育・保育にとって意義があることは、多くの先行研究によって示されてきた（たとえば、瀧（2010）、藪中・吉田（2014）など）。にもかかわらず、糸井嘉らによれば「理論に基づいた方法論は確立されておらず、解説書でも読み方の説明に対し根拠が十分に述べられているとは言い難い」（糸井・浜崎、2019：42）現状にあると言われる。絵本の読み聞かせが、降園前などの活動の合間を用いて行われることも少なくなく（横山・水野、2008）、保育の現場で本来の役割を果たせていないとも指摘される（正置、2015）。絵本の読み聞かせは、正しい方法や本来の役割が幼児教育の現場であまり理解させていないにもかかわらず、子どもにとって大切な活動であるとされているがゆえに、無難な時間つぶしとして重宝がられているのが実態だというのである。とはいえ、絵本の読み聞かせの本来の役割とは何か、またどのような読み聞かせが最も良い方法なのかについて検証することは、多様な立場・考え方がありうるので難しいと言える。そこで、現行の要領・指針の記述から絵本の読み聞かせのあり方を模索し、絵本の読み聞かせに関する従来の保育実践を批判的に吟味することを行うという方法を採用する。

この分析を始める前に、絵本の読み聞かせそのものの多様性について整理し、本稿の分析対象を絞り込むことにする。多様性をめぐる1つ目の視点は、絵本の読み聞かせをする子どもの年齢や人数による違いである。一人の子どもに対する絵本の読み聞かせなのか、多くの子どもに向けた絵本の読み聞かせなのかによって、そのあり方は大きく異なる。幼稚園を含む就学前教育を行う施設全般での絵本の読み聞かせのあり方に焦点をあてる本稿では、多くの子どもに向けた絵本の読み聞かせを分析の対象にすることにする。就学前教育を行う施設であっても年齢が低い子どもや配慮が必要な子どもの場合、一人の子どもに対して応答的に絵本の読み聞かせをすることもあるが、今回の分析ではそうした絵本の読み聞かせは対象外とする。多様性をめぐるもう1つの視点は、絵本の内容による違いである。絵本のストーリーや世界観を楽しむことを目的にする物語絵本などの読み聞かせと、絵本に書かれた言葉や絵などを見聞きして楽しむことを目的にする言葉絵本や科学絵本などの読み聞かせを、同じ水準で検討することは建設的ではない⁽⁶⁾。言葉絵本や科学絵本の読み聞かせでは、絵本に書かれた言葉や絵について子どもと対話しながら（あるときは絵本の内容から脱線しながら）進められることが多い。それに対して、物語絵本の読み聞か

せでは、抑揚をつけずに読み聞かせるなど、絵本のストーリーや世界観が正確に伝わることを重視することが多い。本稿では、物語絵本の読み聞かせについて取り上げることにする。このタイプの読み聞かせでは、言葉絵本や科学絵本の読み聞かせとは違い、絵本の読み聞かせを終えた後、絵本の余韻を味わうため、読後の感想を子どもに訊かないほうがよいという考え方が一定の支持を得ているからである（たとえば、松岡（1987）、村上（1999）など）。読後の感想を子どもに求めない場合、保育者と子どもの間では絵本の内容に関する読後の対話が行われないことになる。従来の保育実践では広く受容されてきたこのような絵本の読み聞かせのあり方について、現行の要領・指針に照らし合わせて検討する。

このような問題関心や分析視角のもと、平成29年告示の『幼稚園教育要領』、『保育所保育指針』、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』に記載された保育内容（言葉）に関する力を育成する保育実践のあり方について、保育現場で日常的に行われている絵本の読み聞かせを例に吟味していく。以下2節では、現行の要領・指針では絵本の読み聞かせにどのような意義があるとされているのかを整理する。3節では、読後に絵本の余韻を味わうため、絵本を聞いた子どもから読後の感想を訊かないという保育現場で普及している読み聞かせのあり方を、現行の要領・指針が示す考えに基づき検証する。4節では、子どもに読後の感想を訊かないという絵本の読み聞かせのスタイルが普及した背景を探り、その背景から子どもに読後の感想を求める際に気を付けなければならない点について考察する。最後に、分析の結果から本稿のまとめを行う。

2. 現行の要領・指針における絵本の読み聞かせの意義

絵本は、たいていの就学前教育を行う施設にはあるポピュラーな教材の一つであるが、そもそも絵本は就学前教育を行う上でどのような意味があるものとして現行の要領・指針に位置づけられているのだろうか。平成29年告示の『幼稚園教育要領』から「絵本」という文字を含む部分を抽出し、その意義を確認することにした。その結果、「絵本」という文字は5箇所あり、それを抜粋したものが表1と表2になる。なお、平成29年告示の『保育所保育指針』と『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』にも、表1と表2に相当する箇所に「絵本」の文字が書かれている。

表1 幼稚園教育要領の第1章での「絵本」記述（文部科学省、2017：5）

第1章総則
第2 幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」
幼児期の終わりまでに育ってほしい姿
(9) 言葉による伝え合い
先生や友達と心を通わせる中で、 <u>絵本</u> や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。（下線は引用者）

表2 幼稚園教育要領の第2章での「絵本」記述（文部科学省、2017：16）

第2章ねらい及び内容
言葉
1 ねらい
(3) 日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、 <u>絵本</u> や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心を通わせる。
2 内容
(9) <u>絵本</u> や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像をする楽しさを味わう。
3 内容の取扱い
(3) <u>絵本</u> や物語などで、その内容と自分の経験とを結び付けたり、想像を巡らせたりするなど、楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにすること。
(4) 幼児が生活の中で、言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること。その際、 <u>絵本</u> や物語に親しんだり、言葉遊びなどをしたりすることを通して、言葉が豊かになるようにすること。（下線は引用者）

現行の『幼稚園教育要領』では、「絵本」という文字は表2で示したように、保育内容の5領域のうち言葉の領域に関する記述でしか登場しない⁽⁷⁾。健康、人間関係、環境、表現の各領域の保育内容に関する記述には「絵本」という文字が一切使われていないのである。しかも表1の「言葉による伝え合い」は、無藤隆によれば、主に保育内容（言葉）に関する「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」とであるとされる（無藤、2018）。このように絵本は、保育内容（言葉）の領域において重要な役割を与えられていると読み解くことができる。また、表2のねらい(3)や内容(9)の「絵本や物語などに親しみ」（文部科学

省、2017：16）という記述から、子どもが絵本に親しめる環境を整えることが保育者にとって重要な役割になっていることが分かる。絵本に関する主要な保育実践である絵本の読み聞かせは、子どもに絵本の世界に触れる機会を与え、絵本に親しむための環境を作り出すという役割を担っていると言える。

では、絵本の読み聞かせは保育内容（言葉）に関するいなかの力を育むことに有益とされているのか。現行の『幼稚園教育要領』によれば、その力は大きく2つに分けられる。1つ目は、絵本の読み聞かせによって、子どもが新しい言語や表現を獲得できることである。**表2**の内容の取扱い(4)には、「言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにする」ために、絵本などを通して「言葉が豊かになるようにする」必要があるという（文部科学省、2017：16）。この部分について現行の『幼稚園教育要領』の『幼稚園教育要領解説書』（以下、現行の『幼稚園教育要領解説書』と表記）は、「絵本や物語、紙芝居の読み聞かせなどを通して、お話の世界を楽しみつつ、いろいろな言葉に親しめるようにすることも重要である。特に語り継がれている作品は、美しい言葉や韻を踏んだ言い回しなど幼児に出会わせたい言葉が使われていることが多い。繰り返しの言葉が出てきて、友達と一緒に声を出して楽しめるものもある。お話の世界を通していろいろな言葉と出会い親しむ中で、自然に言葉を獲得していく。言葉を獲得する時期である幼児期にこそ、絵本や物語、紙芝居などを通して、美しい言葉に触れ、豊かな表現や想像する楽しさを味わうようにしたい。（下線は引用者）」（文部科学省、2018：219）と説明している。美しい言葉や豊かな表現に出会ったり親しんだりして、それらの言葉や表現を自然に獲得できる環境を構成するものとして絵本を用いた保育実践（絵本の読み聞かせなど）が位置づけられている。2つ目の有益さは、絵本の読み聞かせによって、想像する楽しさや想像することの必要性に子どもが気づけることである。**表2**の内容の取扱い(3)では、子どもが絵本「の内容と自分の経験とを結び付けたり、想像を巡らせたりするなど、楽しみを十分に味わう」（文部科学省、2017：16）ことができるように求めている。現行の『幼稚園教育要領解説書』は、絵本から想像するという経験の意義を2つに整理している。1つ目の意義は、「幼児は、その幼児なりの感じ方や楽しみ方で絵本や物語などの世界に浸り、その面白さを味わう（下線は引用者）」（文部科学省、2018：218）というように、想像する自由（荒唐無稽な想像であっても許されること）を経験し、その面白さを知るという側面である。もう1つの意義は、「幼児は、絵本や物語などの中に登場する人物や生き物、生活や自然などを自分の体験と照らし合わせて再認識したり、自分の知らない世界を想像したりして、イメージを一層豊かに広げていく（下線は引用者）」（文部科学省、2018：218）というように、自分自身が今まで知っていることとは異なる世界があることを認識し、そうした世界のことを想像する中で視野を広げるという側面がある。

現行の要領・指針を踏まえると、幼稚園・保育所・幼保連携型認定こども園で絵本の読

み聞かせをはじめとする絵本を用いた保育実践を行うのは、新しい言語や表現を獲得しやすい環境や、想像する自由や想像することの必要性に気づきやすい環境を用意することになるとされているからである。さらに表1の「言葉による伝え合い」という幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の説明によれば、絵本に親しむなかで「豊かな言葉や表現を身に付け」、身に付けた豊かな言葉や表現を使って「経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたり」できるようになるように子どもを育てるべきだと指摘している（文部科学省、2018：218）。絵本の読み聞かせによって子どもが、言葉や表現を身に付けたり、自由に想像し考えを膨らませるだけでなく、考えたことや経験したことなどを他者と言葉でやりとりできるようになることの重要性に言及しているのである。

3. 読後の感想の必要性

現行の『幼稚園教育要領』によれば、「言葉による伝え合い」という幼児期の終わりまでに育ってほしい姿とは、「絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたり」（文部科学省、2017：5）することだとされる。ここでいう「経験したことや考えたことなど」（文部科学省、2017：5）には、絵本を聞いてどう思ったかとか、絵本を聞いて何を想像したかといったことも含まれているはずである。現行の『幼稚園教育要領解説書』では、「幼児が絵本を見たり、物語を聞いたりして楽しみ、言葉の楽しさや美しさに気付いたり、想像上の世界や未知の世界に出会い、様々な思いを巡らし、その思いなどを教師や友達と共有したりすることが大切である。このような経験は、言葉に対する感覚を養い、状況に応じた適切な言葉の表現を使うことができるようになる上でも重要である（下線は引用者）」（文部科学省、2018：204）というように、絵本の読み聞かせを通して、子どもは絵本のストーリーや世界観を想像し「様々な思いを巡ら」せるだけでなく、「その思いなどを教師や友達と共有したりすることが大切」（文部科学省、2018：204）だとしているからである。このような現行の要領・指針の考え方からすると、絵本の読み聞かせの後に余韻を味わうため、読後の感想を子どもに訊かないほうがよいという従来の保育実践は問題だと言わざるを得ない。絵本の読み聞かせを通して感じたことや想像したことをみんなに打ち明けることを事実上禁じることになるからである⁽⁸⁾。子どもに読後の感想を訊くことが絵本の余韻に浸りたい子どもの邪魔になるというのであれば、自分の考えや感想を言いたい子どもだけが話せるようにすればいいのではないか。

しかも、読後に余韻を味わうため、子どもに読後の感想を訊かないほうがよいという考え方は、子どもが自らの考えや感想をみんなの前で表現する機会を奪うだけでなく、絵本の読み聞かせを聞いていた他の子どもの考えや感想を聞く機会を奪うことにもなる。現行の『幼稚園教育要領解説書』によれば、「絵本や物語、紙芝居などを読み聞かせることは、現実には自分の生活している世界しか知らない幼児にとって、様々なことを想像する楽し

みと出会うことになる。登場人物になりきることなどにより、自分の未知の世界に出会うことができ、想像上の世界に思いを巡らすこともできる。このような過程で、なぜ、どうしてという不思議さを感じたり、わくわく、ドキドキして驚いたり、感動したりする。また、悲しみや悔しさなど様々な気持ちに触れ、他人の痛みや思いを知る機会にもなる。このように、幼児期においては、絵本や物語の世界に浸る体験が大切なのである」（文部科学省、2018：213）とされるが、「なぜ、どうしてという不思議さを感じたり、わくわく、ドキドキして驚いたり、感動したりする」機会や「悲しみや悔しさなど様々な気持ちに触れ、他人の痛みや思いを知る機会」（文部科学省、2018：213）は、絵本などを媒介にして一人ひとりの子どもが自力で想像することによってしか獲得できないものなのだろうか。他の子どもが話した読後の感想に触発されて、これらの感情を想像できるようになることはありえないのだろうか。子どもが読後の感想を言い合うことは、吉田新一郎によれば、「見えなかった関連、言葉へのこだわり、思いもしなかったような疑問や質問など、一人で読んでいて（聞いていて）は出せないものに、話し合うことでたくさん出会うことができる」（吉田、2018）ことにもつながる。他の子どもが感じたことや考えていたことを知ることができなければ、子どもが想像できる範囲は狭く、独りよがりなものになってしまう可能性があり、不思議さや悲しみや他人の痛みといった感情を十分に想像できない子どもをかえって増やしてしまうことになるかもしれない。

読後に絵本の余韻を味わうため、子どもに読後の感想を訊かないほうがよいという考え方は、現行の要領・指針が示す保育内容（言葉）に関する力を育てることを次の2つの点で阻害していると考えられる。1つ目は、絵本の読み聞かせを通して経験したことや考えたことなどを自分の言葉で表現し、伝え合う機会を奪っている側面である。2つ目は、絵本の読み聞かせを通して他の子どもが感じたことや考えていたことを聞く機会を奪い、子どもが想像できることを独我的で広がり欠けるものになっている蓋然性である。現行の『幼稚園教育要領』では、指導計画の作成上の留意事項の1つとして「幼児が次の活動への期待や意欲をもつことができるよう、幼児の実態を踏まえながら、教師や他の幼児と共に遊びや生活の中で見通しをもったり、振り返ったりするよう工夫すること」（文部科学省、2017：8）を求めている。子どもが読後の感想を言い合うことはまさに、子どもが絵本の読み聞かせを振り返る活動になっていると言えないだろうか⁽⁹⁾。

4. 読後の感想の留意点

読後に絵本の余韻を味わうため、子どもに読後の感想を訊かないほうがよいという従来の保育実践には、現行の保育内容（言葉）に関する力を子どもに育むことを阻害する側面があることを確認した。少なくとも、読後に絵本の余韻を味わうことが目的であれば、誰からも読後の感想を訊くべきではないといった極端な方法を採用せず、読後の感想を述べるか述べないかを子どもが自由に選べる環境を整えればよかったように思われる。しかし、

読後に余韻を味わうため、読後の感想を一切訊かないほうがよいという考え方が普及し、現在の保育現場でもそれなりの支持を集めていることを見ると、この考え方自体がどうして普及したのかを理解しておく必要がある。読後の感想を訊くべきではないと思わせるような問題が存在していたと考えられるからである。その問題を知ることによって、読後の感想を述べる環境を作る際に注意すべき点についての理解を深めることができるはずである。そこで、就学前教育を行う施設で絵本が果たしてきた役割の変遷を、戦後の『幼稚園教育要領』（『保育要領 幼児教育の手引き（試案）』を含む）における絵本の記述から辿ることにしたい。

戦後の『幼稚園教育要領』において「絵本」の文字が初めて登場したのは、昭和31年告示の『幼稚園教育要領』である。5つの具体的な目標の1つに「ことばを正しく使い、童話や絵本などに興味をもつようになる（下線は引用者）」（文部省、1956：4）という記述がある。また、「絵本を喜んで見る」ことや「絵本について、教師や友だちと話し合う」ことが、保育内容（言語）に関する望ましい姿として示される（文部省、1956：17）。これらの文言からは、読み聞かせをした絵本について保育者や友だちと話し合うことが重視されていることが分かる。それに対して昭和39年告示の『幼稚園教育要領』では、「絵本、紙しばいなどに親しみ、想像力を豊かにする」（文部省、1964：11）ことが指導すべき事項とされる一方で、「その内容や筋がわかるようになる」指導や「紙しばいや劇的な活動などで表現する」指導も求めている（文部省、1964：11）。絵本に親しむことに関する記述は、昭和31年告示の『幼稚園教育要領』と昭和39年告示の『幼稚園教育要領』のどちらにも存在する。しかし、絵本に対する意味づけは、微妙だが大きな違いがある。昭和31年告示の『幼稚園教育要領』では「絵本について、教師や友だちと話し合う」（文部省、1956：17）ことが重視されたが、昭和39年告示の『幼稚園教育要領』では絵本の「内容や筋がわかるようになる」（文部省、1964：11）ことが重視されたからである。昭和39年告示の『幼稚園教育要領』によって、絵本の登場人物の数や絵本が示す教訓など絵本の内容や筋について子どもに答えさせ、教師が正解かどうかを確認するといった対話を読後に行う保育実践が増え、絵本を通して友達と交流するといった側面が薄れてしまった可能性は否定できないのである。

平成元年告示の『幼稚園教育要領』になると、「絵本や物語などに親しみ、想像力を豊かにする」（文部省、1989：7）という保育内容（言葉）のねらい、「絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き想像をする楽しさを味わう」（文部省、1989：7）という保育内容（言葉）の内容が示される。ここでの絵本は、一人ひとりの子どもが主体的に想像し、豊かなイメージを育むための素材として位置づけられる。と同時に、絵本を通して誰かと何かを話し合うといった記述は一切なくなった。このような平成元年告示の『幼稚園教育要領』における絵本の捉え方は、読後に余韻を味わうため、子どもに読後の感想を訊かないほうがよいという考え方とかなり似通ったものだと言える。この両者は、誰かと何かを話

し合うためではなく、子ども一人ひとりが自由に想像し、自分の考えや思いを膨らませるために絵本の読み聞かせが行われるべきだと考えている点で共通しているからである。しかし、平成10年告示の『幼稚園教育要領』では、保育内容（言葉）のねらいが「日常生活に必要な言葉が分かるようになる」とともに、絵本や物語などに親しみ、先生や友達と心を通わせる（下線は引用者）」（文部省、1998：9）に変更されるなど、絵本を通して誰かとやり取りをすることを指向する内容が再び含まれるようになる⁽¹⁰⁾。にもかかわらず、現在に至ってもなお、読後に余韻を味わうため、子どもに読後の感想を訊かないほうがよいという考え方は広く受け入れられ、多くの保育者がその考えに基づく絵本の読み聞かせを実践しているのである。

ここで注目したいのは、平成元年告示の『幼稚園教育要領』において、絵本を通して誰かと何かを話し合うといった記述がどうして一切なくなってしまったのかという点である。考えられるのは、昭和39年告示の『幼稚園教育要領』における絵本に関する記述によって、読後の話し合いが子どもの語彙力や文章理解力を測る聞き取り試験のようになってしまい、絵本のストーリーや世界観を味わい、絵本から想像する楽しさを感じる事が難しくなったことである。平成元年告示の『幼稚園教育要領』では、想像する楽しさを味わうために絵本の読み聞かせを行うと規定し、語彙力や文章理解力を測る問いかけが読後に行えないようにするため、読後の話し合いに関する記述をなくし、読後の話し合いを抑制したのではないかと推測される。その意味では、絵本を聞いた子どもが読後の感想を話し合う際には、保育者が絵本の内容に関する聞き取り試験をするような問いかけをするのではなく、一人ひとりの子どもが絵本を通して感じたことや想像したことを自由に話せる環境を作ることが重要だと言える。読後、どのように話し合うのかによって、そうした環境が作れるかどうか左右されるからである。

5. おわりに

現行の要領・指針に示された保育内容（言葉）に関する力をいかに育成するかについて、保育現場で日常的に行われている絵本の読み聞かせという保育実践を例に吟味してきた。その結果、読後に絵本の余韻を味わうため、子どもに読後の感想を訊かないという保育現場で普及している読み聞かせのあり方が、保育内容（言葉）に関する力を育てることを次の2つの点で阻害していることを明らかにした。1つ目は、絵本の読み聞かせを通して経験したことや考えたことなどを自分の言葉で表現し、伝え合う機会を奪っている側面である。2つ目は、他の子どもが感じたことや考えていたことを聞く機会を奪い、子どもが想像できることを独我的で広がりにつけてしまうものになっている蓋然性である。

最後に、読み聞かせをした絵本の感想を子どもに求めないというスタイルが普及した背景を分析し、語彙力や文章理解力を試すような問いかけを読後に求めることにつながった昭和期の『幼稚園教育要領』を批判し、絵本から想像する自由や楽しさに気づかせようと

した平成元年告示の『幼稚園教育要領』の影響が見られることを示した。したがって、保育者による読後の言葉がけは、絵本の内容について確認する問いかけではなく、絵本を通して感じたことを自由に表出できるような問いかけや雰囲気になるように配慮すべきだと言える。

注

- (1) 正確には、『幼稚園教育要領』、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』は改訂、『保育所保育指針』は改定とそれぞれ表記するが、本稿ではいずれも改訂と表記する。
- (2) 幼稚園教育要領には保育内容という記述はないが、5 領域の内容全体を指す表現がないため、保育所保育指針で5 領域の内容全体を指す表現として用いられている保育内容という表記を代用することにする。また、本稿では保育という言葉（たとえば、保育現場、保育実践、保育活動など）は幼稚園教育を含めた表現として用いている。
- (3) 「育みたい資質・能力」は、「知識及び技能の基礎」、「思考力・判断力・表現力等の基礎」、「学びに向かう力・人間性等」の3つで構成される。これらは、小学校、中学校、高等学校の学習指導要領に記載された「知識及び技能が習得されるようにすること」、「思考力・判断力・表現力等を育成すること」、「学びに向かう力・人間性等を涵養すること」の基礎として位置づけられている。
- (4) 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、現行の要領・指針に示す「ねらい及び内容に基づく活動全体を通して資質・能力が育まれている幼児の幼稚園修了時の具体的な姿」（文部科学省、2017：4）を指す。つまり、「育みたい資質・能力」が十分に育まれた卒園児という理想形を示したものだと言える。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、「健康な心と体」、「自立心」、「協同性」、「道徳性・規範意識の芽生え」、「社会生活との関わり」、「思考力の芽生え」、「自然との関わり・生命尊重」、「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」、「言葉による伝え合い」、「豊かな感性と表現」という10の姿で構成される。
- (5) 滋賀県H市の幼稚園教諭、保育士を対象にした菊井恭子らの調査によれば、「毎日読み聞かせをしている保育者がいずれの年齢でも80%から90%にのぼり、週2・3回程度と回答した者も含めると全体で97%である。保育者による読み聞かせは、保育の中では日常的に頻繁に行われている」（菊井・菅、2016：42-43）と言う。
- (6) 横山真貴子（2004）は、絵本の読み聞かせを行うねらいによって保育者は、絵本を淡々と読むか子どもに問いかけながら絵本を読むかというように、絵本の読み方を変えていることを明らかにしている。この知見は、絵本の読み聞かせそのものの多様性を踏まえて絵本の読み聞かせのあり方を吟味する必要性を唱える本稿

の主張の妥当性を示すものだと言える。

- (7) ただし、絵本という言葉は保育内容（言葉）の領域だけで用いられるわけではない。平成29年告示の『幼稚園教育要領』の『幼稚園教育要領解説書』（文部科学省、2018）では、「絵本」の文字が保育内容（人間関係）、保育内容（環境）、保育内容（表現）の説明文にも登場する。また、平成29年告示の『保育所保育指針』では、「玩具、絵本、遊具などに興味をもち、それらを使った遊びを楽しむ（下線は引用者）」（厚生労働省、2017：154）ことが、1歳以上3歳未満児の保育内容（環境）の内容として示され、保育内容（言葉）以外の領域の内容にも「絵本」の語句が使われている。
- (8) 保育所の1歳児クラスで調査を行った平澤順子によれば、「子どもたちは絵本を通して感じたこと・考えたことを他者に伝え、共有したいという思いが強く感じられた」（平澤、2017：112）という。1歳児であり、読み聞かせの目的や対象人数が本稿の想定とは異なるものの、絵本を通して感じたことを語りたいという欲求をもつ子どもが存在してもおかしくないことを示している。
- (9) この振り返りは、絵本を聞いた子どもにとっての振り返りにとどまらず、絵本の読み聞かせを行った保育者の振り返りにもなりうる。子どもから読後の感想を聞く中で、保育者は、絵本の選定、読み方などを自己評価できるからである。
- (10) 「先生や友達と心を通わせる」（文部省、1998：9）ことは、必ずしも先生や友達と読後の感想を話し合うことを意味するわけではない。たとえば、波木野やよい（1994）が示した、絵本の読み聞かせの中で、同じところで笑うとか、顔を見合わせるといった、絵本を聞く子ども同士の共通体験を「心を通わせる」体験と見なすこともできる。

引用文献

- 平澤順子（2017）：保育所1歳児クラスの絵本場面における乳児の意図伝達と「誘導的身ぶり」ー乳児と保育者の協働に注目してー、日本女子大学大学院紀要 家政学研究科・人間生活学研究科、24、113-122。
- 糸井嘉・浜崎由紀（2019）：読み聞かせにおける読み手の視線が聞き手の態度に与える影響についての考察、平安女学院大学短期大学部保育科保育研究会 保育研究、49、41-48。
- 菊井恭子・菅眞佐子（2016）：集団の場での読み聞かせに対する保育者の意識の変化ー保育経験と担当年齢による差異の検討からー、滋賀大学教育学部紀要、66、39-54。
- 厚生労働省（2017）：保育所保育指針 平成29年3月、フレーベル館、東京、1-39。
- 正置友子（2015）、保育のなかの絵本、かもがわ出版、京都、1-204。
- 松岡享子（1987）：えほんのせかいこどものせかい、日本エディタースクール出版部、

1987、東京、1-224。

文部科学省（2017）：幼稚園教育要領 平成 29 年 3 月、フレーベル館、東京、1-28。

文部科学省（2018）：幼稚園教育要領解説 平成 30 年 3 月、フレーベル館、東京、1-384。

文部省（1956）：幼稚園教育要領 昭和 31 年 3 月、フレーベル館、東京、1-32。

文部省（1964）：幼稚園教育要領 昭和 39 年 3 月、フレーベル館、東京、1-20。

文部省（1989）：幼稚園教育要領 平成元年 3 月、フレーベル館、東京、1-12。

文部省（1998）：幼稚園教育要領 平成 10 年 3 月、フレーベル館、東京、1-15。

村上淳子（1999）：先生、本を読んで！－こころを育てる読み聞かせ実践論－、ポプラ社、東京、1-192。

波木野やよい（1994）：読み聞かせのすすめ－子どもと本の出会いのために－、国土社、東京、1-216。

瀧薫（2010）：保育と絵本－発達の道すじにそった絵本の選び方－、エイデル研究所、東京、1-224。

藪中征代・吉田佐治子（2014）：子どもへの絵本の読み聞かせに対する親の考え－0 歳児、5 歳児、小学 2 年生の比較を通して－、聖徳大学研究紀要、25、47-54。

横山真貴子（2004）：絵本の読み聞かせと手紙を書く活動の分析、風間書房、東京、1-347。

横山真貴子・水野千具沙（2008）：保育における集団に対する絵本の読み聞かせの意義－5 歳児クラスの読み聞かせ場面の観察から－、奈良教育大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要、17、41-51。

吉田新一郎（2018）：読み聞かせは魔法！、明治図書出版、1-198。

短期大学部生活コミュニケーション学科 inouet@suzuka-jc.ac.jp

An Investigation in to Childcare Practice in Kindergarten Under the Revised Course of Study: Focus on Reading Picture Books

Takeo INOUE

Abstract

The purpose of this study is to examine the ideal way of nurturing language skills corresponding to course of study for kindergarten announced in 2017, focusing on the childcare practice of reading a picture book.

As a result, it was clarified that the way of storytelling that is popular in the childcare field hinders the development of language skills in the following two ways. The first aspect is taking away the opportunity to express and communicate in the words of experiences and thoughts through storytelling of picture books. Second, there is a probability that children's imagination will be lonely and lack of breadth when they are deprived of the opportunity to hear what other children have felt or thought.

Finally, it showed that the influence of the “Course of Study for Kindergarten” announced in 1990 was seen as a background to the spread of styles that did not disagree after reading.

KeyWords : Picture book, Storytelling, Childcare contents- language, Desirable growth state by the end of childhood, To share your thoughts after reading